湖医会

大学創立40周年に思う

渡辺　一良（２期生）／湖医会会長

我らが母校、滋賀医科大学が創立40周年の節目を迎え、新たな一歩を踏み出しました。この間に、医学科3,304名、看護学科1,168名の同門の医療人を輩出してまいりました。この膨大な数の卒業生は、滋賀県はもちろん近畿圏ばかりでなく、全国へ世界へと大きく羽ばたいているところであります。そのことを象徴的に示す実例をあげると、本学出身の大学教授就任者は実に50名に上っているのです。この数字は本学と同時期に発足した他の医大、医学部と比較しても群を抜く数字である、ということを記しておきたいと思います。また毎年の湖医会賞の選考会議で感じることですが、本当に優秀で有能な同門生が、目立たない分野・領域を含め、それぞれの立場で頑張って成果を出してくれていることに感心させられます。

本学は創立以来、地域に根差し、世界に羽ばたく滋賀医大、という大目標を掲げてまい進してきました。各種の大学評価、調査でも、居並ぶ古豪の大学に伍して常にトップ集団にいて輝かしい実績をあげ、雑誌などに掲載されていることは良く知られています。このことはまことに誇らしいことであります。

このような活躍ができたことは、40年間の長きにわたって滋賀医科大学やその学生、その卒業生を温かく見守り、支え育ててくださった地元の皆様、関連する諸機関の皆様のお力があったればこそで、このことに心からの感謝を申し上げる次第です。

この節目の年にあたり、これからの滋賀医大はどういう方向性を目指すべきなのでしょうか。経済が窮迫したからと国立大学を法人化し、国庫からの補助金は毎年削減する、追い打ちをかけるように医師研修制度を変革して大学医局を弱体化し、結果的に研修医の大学離れ、大都会への医師集中、診療科間の偏在が顕著になった、そのうえ監督官庁は毎年のように課題を課して対応を迫る、・・・そのような厳しい環境の中で、単科医科大学としてどのような独自色を打ち出し、魅力ある大学としてその存在意義を主張できるか。

そのようなとき、伝統ということが意味を持つのではないでしょうか。本学は発足当初より、医療者としての深い倫理観、高潔な人格、そして確実な医療技術をもつ医療人を育ててきました。また最先端かつユニークな研究をおこなって世界に発信できることを目指し、優秀な教授陣を擁して有意義な結果を出すという方針でやってきました。これらは初代脇坂学長以来、連綿と続く良き伝統であります。その結果として他の強豪大学と渡り合い、滋賀医大独自のカラーを打ち出して存在価値をアピールしてきた歴史でもあります。

開学40周年という節目にあたり、いつまでも我らが母校が活き活きと成長していけるよう、初心を振り返り足下を見つめなおす機会にしたいと思うものです。

医学科後援会

開学40周年に寄せて

塚本　正満／滋賀医科大学医学部医学科後援会会長

本年、滋賀医科大学は1974年の開学から四十周年の節目となる記念すべき年を迎えました。今日に至るまで大学運営に携わってこられました諸先生方や関係者各位、また多くの卒業生の皆さんの努力に、心より敬意を表します。特に、各方面で活躍する皆さんを目に致しますと、当時の第一歩

が今日の地域医療を支える大学の礎となっていることに深い感慨を禁じえません。改めて、心よりお祝いを申し上げる次第です。

滋賀医科大学が歩みを始めた20世紀は、自然科学の領域で幾つもの大きな発見がなされた時代でした。医学・生理学に関わりのある分野に目を向ければ、Alexander Flemingによる抗生物質（ペニシリン）の発見、James Watson、Francis CrickによるDNA分子構造の発見、さらにはJonas Salkによるポリオワクチンの開発などが挙げられるでしょう。それぞれの発見・発明は時代的な要請を背景に行われた側面が強いわけですが、ひた向きに研究に取り組む姿勢と「基礎サイエンス」としての価値・方法論が後世に多くの人の命を救うこと（或いは糸口）に繋がりました。しかしながらその「サイエンス」でさえ、現在に至るも全ての患者を救うことは出来ないわけですから、未解決の問題は相変わらず山積しているといってよいのではないでしょうか。如何なる場合でも、治療は原因と結果の因果関係（論理的普遍性）が明らかになってこそ正しくなされるに違いないと思います。ここで忘れてはならないことは、すばらしい発明や発見が一般社会から敬意を持って受け入れられた大きな理由の一つが、世の人々の幸福に貢献しているという点です。少し飛躍があればご容赦願いたいのですが、医学の世界でいえば「臨床」ということに繋がるのでしょうか。

私自身は医学と縁遠いところに身を置く人間ですが、一人の患者の立場から医療についての在り様を考えることは可能です。医師或いは医療従事者は、健康で人格高潔にして学識が高く、一点非の打ちどころのない人物が望ましいわけですが、常識的に考えればそんなことが簡単にできるわけではない。残念ながら現場の厳しい労働環境がそれを許さないかもしれない。この理想に一歩でも近づくためには、先ず、周りのスタッフと十分に協力できる人間になる必要があります。これはどのような仕事にも通ずる大事なルールです。患者さんが本当に必要としている治療は相手の気持ちに寄り添うところから始まるはずで、分け隔てなく意思疎通できる人物が求められます。本当の意味で「医師」になるとは、国家試験にパスすることを意味しない。継続的な努力、心身の研鑽と最新の知識を学び続ける姿勢が、「知の結晶」としてバランスのとれた「医師」を育てていくのではないかと思います。

今までがそうであったように、これからも医療人にかかる社会からの期待は大きいものがあります。それらに応える為にも滋賀医科大学が中心となり、優れた医療人の育成と先進的な医療技術の発展に貢献し、地域の医療現場に確固たる存在感を示し続けられんことを祈ります。

しゃくなげ会

しゃくなげ会の歩み

高橋　正行／しゃくなげ会理事長

滋賀医科大学の開学40周年、おめでとうございます。しゃくなげ会（滋賀医科大学の献体篤志団体）も準備室が1974年に設置されていますので40周年を迎えます。

素晴らしい創成期

医学部・歯学部には医学生の解剖実習のために死後の自らの身体を何の対価を求める事なく捧げる「献体」を行うボランテイア団体が存在しますが、しゃくなげ会という名称はユニークであり、「滋賀医科大学方式」と呼ばれるご献体への丁寧な対応は全国的に高く評価されています。しゃくなげ会は1975年６月23日に設立され、その発起人は滋賀県前副知事、滋賀県厚生部長、滋賀医科大学学長、滋賀県医師会長、比叡山延暦寺長臈、滋賀県会議員を含む県内の最高有識者から構成されました。滋賀医科大学も脇坂学長・解剖学教室の前田教授・越智教授が陣頭指揮を発揮され、献体受け入れのために教授会が中断されたなど多くのエピソードがあります。学生時代、副理事長の葉上照澄長臈（故人）から「ええかげんな医者になったら承知せんぞ」と叱咤激励された事や脇坂初代

学長（故人）が「ご遺体はあなたたちの先生です。生命への畏敬を常に意識して学びなさい。」と教えられた事は、本学のバックボーンを成しています。

成長期

図１を見ると、登録者数の劇的な増加がわかります。素晴らしい発起人と会員でスタートした事と滋賀医科大学の献体システムの素晴らしさが県民に広く浸透した事の成果です。国も献体法を1983年に「医学及び歯学の教育のための献体に関する法律」として制定されました。これは滋賀医科大学の教職員・学生、しゃくなげ会役員の皆様の尽力の賜物であり、医療者・介護者として活躍されている卒業生への評価です。大学への帰属意識のシンボル（アイデンティティ、心のふるさと）の一つとして、しゃくなげ会は存在すると思います。

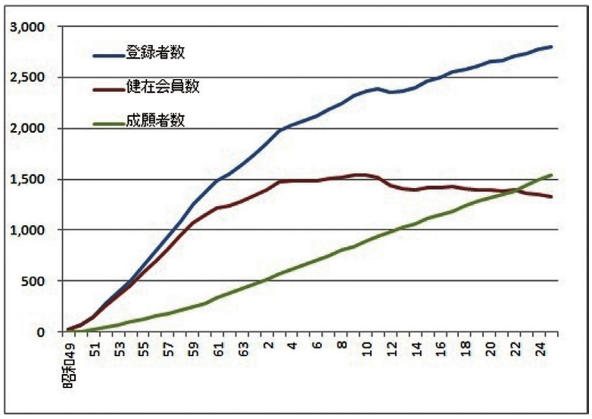


図１　しゃくなげ会の登録者、健在会員数、成願者数の推移

成熟期を迎えて今後の役割

しゃくなげ会の会員は不思議と元気で長生きの方が多くいらっしゃいます。５月の慰霊法要は比叡山の根本中堂近く阿弥陀堂で行われ、納骨式は横川中堂の滋賀医科大学慰霊墓地で行われます（図２）。「祈り」の空間である聖地比叡山ですが、究極のボランティアである献体によって、元気で生きるのに必要な「心」の安定を得られています。しゃくなげ会入会によって「心の落ちつきと安らぎを覚えた」（諏訪初代理事長（故人）、元滋賀県副知事）、「天寿を全うしてしかも最後にまだ何かのお役に立つとすれば本当に冥利につきるものと言えよう」（本原貫一郎初代副理事長（故人）、滋賀県医師会長）など、解脱や悟りの境地を書かれています。毎年、比叡山の石段を登り山道を歩くのは結構大変です。元気で長生きに必要な「ロコモ（運動器）」を衰えさせてはいけないと運動を継続されている会員も多くいらっしゃいます。毎年、10月の教養学習会では毎年、滋賀医科大学の先生方や各地で活躍されている卒業生の皆さまから貴重なお話を解りやすくお話頂いております。熱心にメモを取って実践する会員も多くおられます。難しい事は置いといて、ボランテイアは楽しい、しゃくなげ会の善意・心の落ち着き、自分の死後の役割を決めたのがしゃくなげ会員です。40周年を迎えられた滋賀医科大学とその卒業生の今後の大きな成長を大いに期待しております。

図２　比叡山横川中堂にある滋賀医科大学墓地（納骨式に撮影）

学外有識者会議委員

未来を拓く滋賀医科大学への期待

井村　裕夫／先端医療振興財団理事長

滋賀医科大学が創立40周年を迎えられ、ますます発展の一途をたどっておられることは、まことにおめでたいことであります。私も滋賀県の出身であり、滋賀医科大学の学外有識者会議の委員も務めましたので、大学の発展を目の当たりにすることに大きな喜びを感じております。

滋賀医科大学が創設された当時を振り返ってみますと、第一次オイルショックがあったとはいえ、わが国は高度経済成長の真っただ中にありました。第二次世界大戦後のベビー・ブーマーが生産年齢に達して高齢者を支え、国民皆保険制度も年金制度も充実しつつありました。そうした中で医師の不足が懸念されるようになり、一県一医大の掛け声の下新設医大が無医大県に次々と設置されました。滋賀医大はその中でも先頭の集団に属しており、近畿地区を中心に新進の優秀な教員と向学心に燃えた学生を集め、比較的短期間に高い評価を受ける医大へと成長されました。関係者の皆様のご努力は大変なものであったと推察し、敬意を表します。

それから40年、わが国は大きく変貌いたしました。「失われた20年」と呼ばれる低成長の時代の間に、世界は大きく変化し、とくにアジア諸国の発展が顕著となりました。そしてわが国にとって何よりも大きな課題は、少子高齢化が世界で最も早い速度で進んだことであります。かつては多くの生産年齢の人が、１人の高齢者を支える胴上げ型でありましたが、今や３人が一人を支える騎馬戦型となり、近い将来１人が１人を支えるおんぶ型になります。日本人の長寿に最も大きな役割を果たしてきたわが国の優れた医療制度も、増大する医療・介護費のために危機に立とうとしております。今年は戦後のベビー・ブームの最後の年に生まれた人が65歳に達しますので、いよいよ超高齢社会元年ということになります。しかも出生率は下げ止まりしたとはいえ増加せず、今後所得税などの税収の大きな増加を望むことができません。消費税は上げざるを得ないでしょうが、それにも限界があります。限られた資源を最大限に活用して、国民の健康長寿をどう支えていくかが大きな課題であります。

そのために求められるものは、病気の治療よりも予防であり、対症療法よりも原因療法であり、そして個人の特徴に応じた「個の医療」であります。かついったん障害が起こった場合の再生医療、リハビリテーション、補助装具などの開発も必要になります。そして多くの人が質の高い生活を送って、安らかに最期を迎える終末期医療の在り方も問題になります。また社会が急速に変貌していく中で、小児の発達障害や成人の精神疾患も問題になっています。しかも人口の都市集中が進む中で、医療の地域格差も重要な課題です。医学と医療は、いま明らかに一つの重要な転換期を迎えています。それは一言でいえば、人々が病気になるのを待って治療する受け身の医療から、コミュニティの中に入って予防に努力する攻めの医療への転換であり、胎児期から成人期までの健康にも配慮するライフ・コース・ヘルスケアー（生涯を通した健康戦略）であり、そして人生の最期を迎えようとする人々を支える医療であります。

このように考えますと、当然医療人の育成にも変化が求められます。もちろん医学は日進月歩であり、研究の振興と高度の専門医の育成は、大学にとっても重要な課題であります。しかし高齢者は複数の病気を持っていますので、専門医のみで対応することは効率も悪く、適切でもありません。その意味で家庭医、あるいは総合医と呼ばれる医師の養成に、本格的に取り組まねばならない時が来ています。滋賀医科大学は、その面で有利な位置にあるのではないかと言えます。それは東近江市の東近江総合医療センターがすでに立派に活動を始めており、それを中心にした総合医の教育体制が整いつつあるからであります。また滋賀県はその面積や人口からみても、医療過疎地域を少なくするのに適切な規模であります。今後滋賀県の北部地域とどう連携体制を整えていくかが課題でありましょう。それがうまく進めば、わが国における一つのモデルケースになるのではないかと考えます。

滋賀医科大学は40年の間に確固とした基盤を形成され、より大きな発展を目指して歩む体制ができたと言えましょう。わが国が、そして世界が急速に変わろうとしているこの時期に、新たな未来を先導する大学の一つに育ってほしいと念願しております。

経営協議会
委員

滋賀医科大学との40年間の思い出

池口　博信／元 滋賀県出納長

滋賀医科大学開学40周年、誠におめでとうございます。

心からお祝いを申し上げます。

私と滋賀医科大学との関わりは、まさに今から40数年前に始まり、以後、不思議なご縁といいますか、３度の出会いがありました。

まず最初の関わりは、昭和47年であります。

当時、県職員でありました私は、東京事務所勤務をしておりましたが、時の政府の方針で示されました「一県一医科大学設置構想」を受け、その当時全国で未設置県が20数県ありました中で、我が滋賀県も是非これを誘致しようと急遽その取り組みが始まり、早速県庁内に「国立医科大学誘致準備室」が設置され、東京事務所での担当として私が特命を受けたのであります。

以後「何としても滋賀県に医科大学を・・・」を合言葉に、日夜を問わず文部省はじめ文教族と言われた国会議員や関係団体などへの陳情・要望活動を強力に展開した結果、今でも忘れもしませんが、昭和47年12月の国家予算案の決定に際し、時の文部大臣奥野誠亮氏より来年度の国立医科大学の設置は「滋賀県と宮崎県」と発表されました時には、それまでの苦労が一度に吹っ飛んでしまい、本当に胸が熱くなったのを昨日のことのように思い出しております。

そして、昭和49年10月１日に滋賀県民の大きな期待の中で開学したところであります。

以来、多くの関係者のご尽力により順調に発展してまいりました滋賀医科大学に２度目の出合いが訪れました。

それは、私が県庁で当時、健康福祉部長をしておりました時に平成12年１月から13年３月までの１年２ヶ月の間、第４代小澤和惠学長の時代でありましたが「外部評価委員会委員と倫理委員会委員」として務めさせていただいたところであります。

当時は、県職員が現職として委員を務めるのは全国でも珍しい事例だと聞かされておりましたが、それだけ滋賀医科大学が滋賀県との太いパイプで連携していた証ではなかったのかと思い起こしているところであります。

そして３度目の関わりは、県の出納長を退任いたしました翌年の平成20年４月から26年３月までの３期６年間にわたり、第６代馬場忠雄学長のもとで「経営協議会委員」として参画させていただきました。

特にこの期間は、平成16年４月１日より「国立大学法人滋賀医科大学」として新たな組織でスタートしてから５年目を迎えるという極めて重要な時期であったと思っております。

さらにまた、このスタートに合わせて策定されました「第１期中期計画（平成16～21年度）」が終盤を迎え、その纏めを行うとともに、第２期の新しい計画（平成22～27年度）を策定しなければならないという大事な時期でもありましたが、馬場学長の「トップマネージメント」のもとに関係者が一丸となって、さらなる発展充実にご尽力いただくとともに「経営協議会」においても積極的な議論をすすめるなどの中で、文部科学省や滋賀県はじめ関係の皆様方より大きな信頼と評価を得ることとなったところであります。

数ある評価の中から、特に顕著な事例を見てみますと、大学全体では、まず「全国医科系大学の地域貢献度ランキング」で上位を占めたこと（平成24年度、全国28大学中第２位）や「国家試験合格率」が全国で第１位であったこと（平成22～23年度、医師99%、看護師100%、保健師100%、助産師100%）、また附属病院においても「全国の頼れる病院ランキング」でトップクラスの評価を受けたこと（平成25年度、全国1,205病院中第２位）や県内で初めて「手術支援ロボット『ダ・ヴィンチSi』を導入」するなど常に最先端の医療技術が整備されていること、さらにまた「大学の地域経済に及ぼす影響」も総合評価として約240億円という大きな波及効果が示されたこと（平成25年度調査結果）などにより、その信頼と評価は絶大なものになっていると思っています。

これもひとえに開学以来、歴代学長をはじめ大

学関係者の皆様方の日夜にわたるご尽力の賜と心から敬意を表する次第であります。

そしてこのたび、開学40周年を迎え、これまでの卒業生も全体で約4,500名となり、世界や日本、そして滋賀県にも滋賀医科大学の大きな輪が広がっている中で、大学を取り巻く環境も大きく変化しているところであります。特に最近、文部科学省においても国立大学の機能強化や再編・統合なども視野に入れた「国立大学改革プラン」が示されるなど厳しい状況が続くものと思われますが、どうか今後とも、世界や日本、そして滋賀県民の大きな信頼と期待に応えていただくためにも、滋賀医科大学の建学の理念にもあります「地域に支えられ、世界に挑戦する大学」を基本として、さらなる躍進を続けていただきますよう専一にご祈念を申しあげるところでございます。

滋賀県医師キャリアサポートセンター

開学40周年を祝して

角野　文彦／滋賀県医師キャリアサポートセンター センター長
（滋賀県健康医療福祉部次長／滋賀医科大学特命教授）

滋賀医科大学が開学40周年を迎えられたことを、心からお祝い申し上げます。

滋賀県は、この少子高齢化社会の中にあって、自然増減率、社会増減率ともに増加している数少ない人口増加県の１つです。これは、近畿1,450万人の水源でもある琵琶湖を始めとする豊かな自然環境を有し、また、比叡山延暦寺、彦根城などに象徴される古い歴史を有する一方で、京都、大阪などの大都市にも近く、「ほどほどの都会、ほどほどの田舎」として非常に暮らしやすい地域だからではないかと思います。

しかしながら、滋賀県においても医師不足は深刻な問題であり、今後滋賀県においても急速に進んでいく高齢化に備えるためにも、県民の皆さんの安全・安心を確保する必要があります。

このため、滋賀県では、平成19年４月に、「滋賀県医師確保支援センター」を設置し、「医師確保システムの構築」「魅力ある病院づくり」「女性医師の働きやすい環境づくり」の３つを大きな柱として、医師確保の取組を多方面から進めてきました。

こうした取組もあって、県内の医師数は一定増加しているものの、引き続き医師の偏在解消に取り組んでいく必要があります。

こうした中、平成24年９月に、これまでの「滋賀県医師確保支援センター」を継承し、さらに発展させるものとして、滋賀県と滋賀医科大学とが連携し、県医師会や県病院協会の御協力をいただきながら、「滋賀県医師キャリアサポートセンター」を設置しました。

滋賀県医師キャリアサポートセンターは、それまで滋賀県が医師確保支援センターにおいて取り組んできた、修学資金等の貸付事業など医師確保の取組に加え、特に次の２つの取組を進めていくこととしています。

まず１つ目は、若手医師が県内で地域医療に従事していく過程でキャリアアップを図ることができる研修プログラムを作成・提供することです。

研修プログラムについては、滋賀医科大学医学部附属病院を始めとする県内の多くの病院の協力を得て、それぞれの特長を生かした研修が受けられるような、総合医や専門医を目指すプログラムを作成・提示し、これをもとに、個々の医師、医学生の希望等に応じたオーダーメイドのプログラムを策定することを目指しています。

次に２つ目は、医師のための総合相談窓口を設置し、医師・医学生等からの就業・キャリアアップ等に関する相談や、女性医師からの臨床現場復帰などに関する相談への対応を行うことです。

特に女性医師に関しては、出産・子育てにかかわる相談への対応や、出産・子育てによりいったん臨床の現場を離れた方の復帰に際し、滋賀医科大学が有するスキルスラボ等を活用した技能研修を実施するなどといった、具体的な対応を行っていきたいと考えています。

これら２つの取組に関しては、いずれも県のみで進めることは困難なものであり、滋賀県内で唯一の医師を養成する教育機関である滋賀医科大学

の協力なしには進めることができません。引き続き連携して取組を進めていただきますようよろしくお願いします。

さて、現在、国においては、地域包括ケアシステムの構築や効率的かつ質の高い医療提供体制の構築を図るため、医療・介護制度の改革が進められています。

また、県医師キャリアサポートセンターの取組は、まだ途に就いたばかりであり、国の医療・介護制度の改革とも相まって、今後より一層充実させていく必要があります。

滋賀医科大学の理念は、「地域の特徴を生かしつつ、特色ある医学・看護学の教育・研究により、人類の健康、医療、福祉の向上に貢献する」こととされており、とりわけ人材育成に関しては、「地域住民の協力による地域基盤型教育により、患者の立場に立った全人的医療を目指す医師を養成する」こととされています。

このような滋賀医科大学だからこそ、医療・介護制度の改革や、これを踏まえた滋賀県の地域医療の充実に対して、大きな役割を果たしていただけるものと期待しております。

滋賀医科大学におかれましては、全国に、そして世界に羽ばたく医師の養成に御努力いただきますとともに、滋賀県の医師養成の拠点として、地域に根差した医師の養成にも御尽力いただきますようお願いいたします。そして、滋賀医科大学が、次の10年、さらに飛躍し、ますます発展されることを御祈念申し上げます。

東近江総合医療センター

滋賀医科大学開学40周年によせて
－「不惑の年になり、今後の展望は？」

井上　修平／独立行政法人国立病院機構
東近江総合医療センター　院長（呼吸器外科）

滋賀医科大学の誕生から40年～田中角栄首相の日本列島改造論から各都道府県に最低でも１カ所の国立大学医学部を創設するという施策が誕生の裏にあったと記憶しています。寂しかった瀬田にも駅が出来、今では近隣に立命館大学、龍谷大学も併設され、ヤンマー坂を含め瀬田の丘の上の文化ゾーンは様変わりしました。私は滋賀医大の３期生で、先日30周年の卒業同窓会が主催されました。しかし滋賀県で活躍している同級生は少なく、未だに滋賀県内の主要な関連病院の要職が少ない現状です。

さて当院は新臨床研修制度が始まった平成16年から京都府立医大の医師引き揚げの影響をまともに受け、常勤医が35人から12人まで減少しました。しかし平成22年１月に策定された滋賀県地域医療再生計画及び平成22年６月に策定された東近江市病院等整備計画により、当院と東近江市立の２病院を再編成し、当院が320床の中核病院となり平成25年４月に独立行政法人国立病院機構東近江総合医療センターへと生まれ変わり、医師数も40人まで増加しました。また当院は滋賀医大の第２教育病院としての使命があり、総合内科学・総合外科学講座を中心として医学生・研修医の教育も開始しており、まもなく滋賀県でも最も充実した設備であるスキルスラボも稼働します。

滋賀医大が創立されて40年が経ちましたが、まだまだ優秀な卒業生が他大学に流出しているのが現状です。推薦入学制度、奨学金制度、地域里親学生支援制度、滋賀医療人育成協力機構設立、滋賀県医師キャリアサポートセンター設立等の事業の成果はこれから期待されるところですが、大学及びその関連施設が医療者に魅力あるようにしていかなければなりません。大学にいても関連病院にいても、臨床研究を継続しインパクトファクターのある論文発表ができる環境を作れれば、滋賀医大の教授選や関連病院の要職に滋賀医大卒業生が就任でき、後輩も後に続いてくれると思います。滋賀医大の卒業生が自校を自慢できるような時代になれば、県外からの医療者も集まり、人財豊富な滋賀県となると思います。

これからの日本は「少子高齢化」という大きな問題をかかえており、人口も減少しています。2025年には団塊の世代が75歳以上の後期高齢者となり４人に１人は75歳以上という超高齢化社会が

到来します。また2040年には20～39歳女性が半減し全国1,800市区町村の半数に当たる896自治体が消滅するという推計が出されました。これらの将来の状況を考え、医療者にとって、また患者さんにとって魅力的な病院作りが重要になってきます。その一端を滋賀医大が責任を持って担うべきだと思います。少子高齢化の現代では病院を中心とした街作りが重要になり、それには行政と協力して医師派遣を含む医療体制の確立・変革が時代にあった形で具現化しなければなりません。不惑の年になった滋賀医大の新執行部にも将来ビジョンを踏まえてのリーダーシップを期待しています。

公立甲賀病院

滋賀医科大学から県内地域病院へ活力を

清水　和也／公立甲賀病院院長

公立甲賀病院は昭和14年に創立され、今年で75年目を迎えています。しかし、１年前に移転新築したため往時を偲ぶ風情が全く無くなり寂しい思いをしていますが、新たな歴史の幕開けと考え思いを新たにしております。滋賀医科大学は当院より遅れること35年の創立ですので、まだ伝統というには早過ぎると思いますが、その存在感は年を追うごとに増していると感じています。

滋賀医科大学の最近の歩みを見ますと、平成７年に特定機能病院の指定を受け、さらには約10年前の法人化を契機とした経営面の重視により、臨床への強い傾斜が図られたと拝察しています。その結果として現在では、県内の高度専門医療における最後の砦となるとともに、先端医療開発においても着々と成果を上げ、経営的にも極めて優良な病院となられたと認識しております。しかし一方で、大津日赤や長浜市民を始めとする県内の有力病院などと競合することにもなり、また地方の二次医療圏で治療可能な症例までもが、大学病院へ流れて行ったことも少なからずあったと思います。恐らくこういうことも、大学病院経営安定の一端を担ったのではないかと考えます。当院でも新名神高速道路が６年前に開通したことで甲賀圏域と草津や大津が近くなり、ある意味陸の孤島であった当圏域から、手術の必要な患者さんが大学病院へかなり流れて行くことにもなりました。かつての病院の老朽化や力量不足も要因として挙げられますが、何れにせよ病院収支が伸びあぐね、先行きに不安をもたらしたことは事実であります。

このことから共存共栄を図るべしというのではなく、大学病院としての本来的役割を追及すべきではないかと問い掛けたいのであります。大学は臨床研究に力を注いでいる症例、高度先端医療を要する症例、難治症例、学生や若手医師への教育となるべき症例に絞って行くべきではないかと考えます。大学病院で日常臨床に忙殺されるのは論外であり、研究やその発表などに時間を余すべきであろうと思います。さらには症例が地域へ回帰することによって地域の病院が充実し、人材を養う余力のもとに滋賀医大医局出身の優秀な人材が県内の病院に吸収されて行くと考えるからです。病院の力量は中堅医師のポテンシャルにかかっていると思います。従って、中堅医師が大学から地域基幹病院へ送り込まれ、臨床研究で身につけたセンスを実臨床で生かしてくれれば、県全体の医療レベルは確実にアップすると考えます。そして、彼らが大学に戻り、新たな医師が派遣されることになれば理想的な医療が展開されることになります。

滋賀県内でも大津湖南地区を除いては、病院医師不足が目立ち始めて来ています。滋賀医大医局に人材が少ないことは承知していますが、県外派遣を縮小してでも県内の地域基幹病院との人事交流を進めるべきだと考えます。今後は県内の一部病院を除いて、地域基幹病院の人材供給源は滋賀医大に頼らざるを得なくなると思います。隣県のような医療過疎を生じさせないためには、この40周年を契機にして、教育プログラムよりも滋賀医大出身者が県内へ残ろうとする環境をまずは整えるべきではないでしょうか。

長浜赤十字病院

滋賀医科大学開学40周年に寄せて

濱上　洋／長浜赤十字病院院長

滋賀医科大学開学40周年おめでとうございます。

世界に羽ばたくとともに、滋賀の地域医療に貢献してこられた40年間に心より敬意を表します。

さて、長浜赤十字病院では内科の全ての診療科、小児科、精神神経科、脳外科、耳鼻科、歯科口腔外科、病理が滋賀医科大学の医局人事に属しており、外科の３名を筆頭に、それ以外の診療科も含めて常勤医70名中36名が滋賀医科大学の卒業生です。研修医については平成16年臨床研修開始以来33名中20名が滋賀医科大学出身です。また３名の副院長のうち２名が滋賀医科大学の２期生と７期生で、困難な時代状況の中で昨年より管理職として幾つもの重要な役割を担って活躍中です。その上多くの滋賀医大の先生方に、医師不足を補って非常勤で診療のお手伝いをお願いしており、心より感謝申し上げます。

次にこの場をお借りして、平成25年に竣工した当院の改築事業のポイントをいくつか紹介させて頂きます。

１）救命救急センター

MR、バイプレーンアンギオの増設、CTの更新等のハードの整備。

拡張したカンファランス室にて、この４月より、専従医の欠員をカバーするとともに救急医療のレベルアップと担当医の負担軽減を目的として、救急・集中治療サポートチームが活動を開始しました。月・水・金の朝８時より、30名近くの医師・研修医・センターNs・薬剤師・SW・ME・PT・臨床検査技師・栄養士等が集結し、60インチモニター２面を駆使して真剣で本音の症例検討を、時に喚声を交えつつ行っています。時々にケースに応じてテーマを与えられた研修医によるミニレクチャーが私にはとても勉強になります。

２）精神神経科

築40年を過ぎ、老朽化して耐震性にも問題のあった旧館より新２号館に病棟外来とも移転しました。そもそも150床あった精神科病床は既に100床まで減床していましたが、今回は２病棟70床になりました。将来的には貴学精神科教室の強力なバックアップにより精神保健指定医の増員を受けて、いわゆる精神科スーパー救急を目指します。

３）総合医局・女医ラウンジ

新２号館の４階に院長以下全医師の集う総合医局を整備しました。もともと個室であった部長の先生方には少し我慢していただくことになりましたが、診療科内だけでなく、全科にわたってコミュニケーションが進み、セキュリティの面からも正解でした。また将来の女性医師の増加を予想して、３つのベッド、ソファ、シャワー、トイレを備えた女医ラウンジを別に用意しました。人の目を気にせずに仮眠や休息を取っていただきたいとの思いです。ただ研修医室は設計の関係で別階になりました。

冬季仕様の立体駐車場も整備され、当院の旧の建造物は全て新調されました。

後は本館における手狭になったNICUの増床とICUの改築ですが、これらは少し時間をかけて検討してまいります。

滋賀医科大学も改築事業を達成されて開学40周年を迎えられました。器が準備されればあとは人です。滋賀医科大学を卒業した研修医や若い医師が県下の病院に着任し、研修し臨床経験を積んで大学へ戻り、研究や高度先進医療に専念後、多くがまた地域へと赴任する。そのような自主的で自然な良循環がまさに必要とされています。当院も今後ますます多くの診療科が滋賀医大卒の医師を中心とした混合チームを志向することになります。患者さんからだけでなく、医師や看護師にとっても魅力ある病院を目指します。

今年開学40年を迎えられトップマネージメントを一新された滋賀医科大学が教育・研究・診療の拠点として、また将来も県下病院群の中心として年月を重ね共に発展していくことを願っています。

医学科卒業生

滋賀医科大学の開学40周年に添えて

笹原　正清（１期生）／富山大学

教育機関としての優れた多くの医療人の輩出と、医療・研究機関としての素晴らしい実績の積み重ねにより、滋賀医科大学の伝統は着実に大きく培われています。歴代の先生方やスタッフの皆様方の絶え間ないご指導とご鞭撻、さらに多くの皆様方のご支援のお蔭と、卒業生の一人と致しまして深く御礼申し上げます。一期生として入学の後には学生数も少なく、新設医大の将来を不安を持って語らったこともありましたが、これらは完全に過去の杞憂となりました。滋賀医科大学の卒業生であることに喜びを感じながら診療と研究に勤しんでいます。

1999年の９月に滋賀医科大学から富山医科薬科大学の第二病理学講座（現富山大学　病態病理学講座）に転出いたしました。各種委員会、昨年からは生命科学先端研究センターや地域連携機構の部門等の兼任となりましたが、自らの講座の運営に加え、さらに大学の運営に寄与することの難しさを感じてきました。その中で、富山の教授会でしばしば拝聴しました滋賀医科大学の素晴らしい発展には何度も勇気づけられ、元気をいただきました。第 104 回の医師国家試験の全国第１位に代表される継続的に非常に高い医師および看護師国家試験の合格率、附属病院の重要な基盤となる研修医の突出して高いマッチング率、全国86の国立大学法人中２位となりました第一期中期目標期間の大学の活動に対する文科省・国立大学法人評価委員会の評価など、いずれも大きなインパクトとともに富山大学の教授会の話題となりました。一朝一夕で成ることではなく、強力なリーダーシップと構成員の方々の多大なご努力なくしては達成できることではありません。外部資金の獲得、地域に根差した革新的な教育構想などの戦略が見事に運用されている様子が大変よく伝わって参りました。

そして、幸いにして多彩で優れた多くの私たちの同窓生が、存知あげます範囲だけでも、基礎から臨床医学あるいは地域医療等の様々な分野で、西は長崎、南は琉球、北は札幌、さらに東は東京医科歯科大学から産総研と、全国の至る所でそれぞれが突出した素晴らしい活躍をされています。“新設医大としては”というくくりはもはや無用であり、文字通り国際的な医科大学の一つとしてオーソドックスに、同時に革新的に伝統を積み上げ、大きく根を張り見事に発展していく母校を誇れることをありがたく感じます。私自身は何かに突出するということはなかなか難しいかも知れませんが、富山大学の職員ならびに滋賀医科大学の卒業生として、自らに与えられた職責に力を尽くしてまいりたいと思います。今後ともどうぞよろしくご指導くださいますようお願いいたします。

末筆ながら、益々の母校と関係各位のご発展とご活躍を祈念いたします。また、紙面の関係より触れることができませんでしたが、同窓会をご指導くださいます皆様にも深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

医学科卒業生

滋賀医科大学開学40周年にあたり

鈴木　康夫／東邦大学医療センター佐倉病院
内科　主任教授

滋賀医科大学開学40周年という節目にあたり、不出来な学生で何とか卒業させていただいた私には大変恐縮僭越ではありますが、折角のご依頼でありますので稚拙な短文を書かせていただきます。

滋賀医科大学が開学して40年ということは、一期生である私共にとっても入学してから既に40年が経ったのかと感慨深いものがあります。40年前入学した時は未だ本校舎は完成せず、まるで高校生活の延長のような守山の仮校舎で授業を受けながら過ごした１年半の時間は、仮住まいという居心地の悪さにもかかわらず念願の医学生となった溢れる高揚感に満ち満ちていた学生達と、新たな医学部創生に向け一丸となって熱い思いで奮闘する教職員の皆様方とが入交り、情熱が渦巻く守山の日々は一日一日新鮮な出来事の連続で彩られた、人生で最も強い光を放ち続けた瞬間の連続であったような気がします。

その後は現在の本校舎へ移転すると共に、私自身は瀬田に居を構え何とか６年間で卒業、当時細田先生が主宰された消化器内科に入局するか迷ったあげく郷里の千葉県に戻り、千葉大学第二内科に入局、松戸市立病院・千葉市立病院勤務後のアイルランド留学を機に炎症性腸疾患診療を生涯の糧と決めひたすら突き進み、その後縁あって現在は東邦大学医療センター佐倉病院内科で勤務をしております。

随分と滋賀医科大学とは距離の離れたところで活動していますが、炎症性腸疾患という共通の診療分野を介して前学長馬場先生や現副学長藤山先生から直接ご指導をいただく機会に恵まれ、また消化器内科学教授安藤先生や辻川教授とも一緒に時間を過ごすことが多く、また全国各地で講演する機会には聴講にきていただいた滋賀医科大学の卒業生に声をかけていただく機会も多くなり、滋賀医科大学が距離の割には身近に感じてきました。

縁あって、本年４月より厚生労働省難治性腸管障害調査研究班の主任研究員を仰せつかり、現在はその組織づくりや総会に向けた準備で忙しく過ごしております。滋賀医科大学卒業生の一人として恥ずかしくない様、日本中の炎症性腸疾患に携わる先生方と一丸となって世界をリードする研究成果を発信できるよう全力投球で精進するつもりでおります。

今後ともさらに一層、滋賀医科大学の関連する先生方の多大なるご支援ご指導をよろしくお願い申しあげます。

医学科卒業生

北の大地から「人間尊厳の医療」を発信する

藤宮　峯子（１期生）／札幌医科大学解剖学第２講座

私は今、北海道の大自然の中で、「人間尊厳の医療」を打ち立てるため、教室のスタッフと一丸となって研究に打ち込んでいます。40年前に滋賀医大の一期生として入学した当時の、輝くばかりに前向きな気持ちは全く衰えていません。むしろ夢はもっともっと大きくなり、絶対に成し遂げられるという確信も当時とは比べものにならないくらい強くなっています。

今私が取り組んでいることは、糖尿病とアルツハイマー病の骨髄間葉系幹細胞療法で、間葉系細胞の組織修復能力を引き出す再生医療です。30年前に研究を始めた時から、社会的貢献度の高い研究を成し遂げることが夢でしたが、今は、一層険しい頂上を見上げて、最終アタックに挑む心境です。この医療が実現すれば、どれだけ多くの人が救われるだろう、という思いが基礎医学研究に徹してきた私を突き動かすのです。

細胞療法の先に見据えているのは、生き方を変革することで自己治癒力の元になる細胞を活性化し病気を予防するという「人間蘇生の医療」であり、現代医療のあり方そのものを変革したいのです。

このようなチャレンジ精神を育んでくれたのは、滋賀医大でお世話になった恩師や多くの仲間たちです。脇坂行一初代学長が示された開学の精神は、「一隅を照らす」人物を育てることでした。脇坂先生の言葉で印象的なのは、「トップに立つ人間は自分を律すること」。佐野利勝副学長の、「良いお医者になってください」という言葉。解剖学初代教授の前田敏博先生からは、「献体をしてくれる方に最高の敬意を払う」ことを教えられました。６年前に湖国から北の大地に赴任した私は、これ

ら恩師の言葉に忠実に生き、最高の成果を上げて恩返しをしようと決意しました。

一期生の精神は、後輩を守り育てること。母校を離れた私に出来ることは、あくまでも病に苦しむ人を救っていこうとする強い意志を持つ後継者を一人でも多く育てていくことだと考えています。

医学科卒業生

滋賀医科大学開学四十周年記念誌に寄せて －滋賀と横浜、いま思うこと－

前川　二郎／横浜市立大学医学部形成外科学　主任教授

滋賀医科大学開学四十周年、誠におめでとうございます。また、今日まで滋賀医科大学の発展に貢献され、支えてこられた関係の皆様に一卒業生として心から感謝申し上げます。約四十年前、私が二期生として滋賀医科大学に入学した当時を振り返ると、例えばCTが国内に導入された時期で、その後に臨床の授業でも取り上げられ話題となったのを思い出します。今ではCTは標準的な診断のモダリティーであり、どの科においても不可欠となったことを考えると隔世の感が致します。この四十年間に滋賀医科大学が行ってきたことは数多くあると思いますが、医学科に関して言えば最も大きな世の中への貢献は、毎年百名におよぶ優秀な人材を育て上げ、三千名を越える医師を世に送り出したことだと思います。何人もの卒業生を私が直接、横浜で指導する機会を得ましたが、実際、優秀な人材に育て上げられていることを実感し、周囲からの評価も高く、とても誇らしく思っています。

さて、私が滋賀を離れ横浜に勤務してすでに三十余年になります。思うことは、横浜は規模が異なるものの滋賀、特に大津、草津、湖西と似た地理的条件にあることです。滋賀は京都や大阪という近畿圏の中心の周りにいわゆるベッドタウンとして人口が増加し、それに応じて地域経済が発展しています。横浜は東京のベッドタウンとして発展してきた側面があり、医療を見ても同様なことが言えると思います。横浜を通る鉄道、道路の多くは東京都心に向かっており、救急疾患やコモンディシース以外では横浜の地元の病院でなく東京の病院へ行く患者さんが多くいます。

近年、経済のグローバル化が著しく、医療とて例外ではありません。インターネットで世界中の医療情報を知ることができ、自国で行われていない治療や自国より安く治療を受けるため、国や医師を求めて患者さんは容易に国境を越えます。メディカルツーリズムという言葉をご存知の方も多いと思いますが、世界規模で医療の競争がすでに始まっています。日本は医療技術、医療保険制度など世界的に見て医療レベルは高いと思いますが、医療コストやソフト面などから見ると十分な競争力があると言い切れません。私は自分の専門で世界からいかに患者さんを呼ぶことができるか、医療コストも十分に加味して情報発信を行っていく準備をしています。翻って滋賀医科大学が京都や大阪の病院を向こうに回していかに特徴を出し、競争力をつけるか、近畿圏のみならず全国から、いや世界から患者さんを呼ぶことができる滋賀医科大学であるにはどうしたらよいか、すでに関係の方々で議論がされてきたかと思います。これから十年、二十年先の世の変化は今まで以上に大きく、グローバル化します。私はこの度の四十周年を一つの節目とし、滋賀医科大学が今まで蓄えた財産を大いに活用してさらに発展することを期待して止みません。

医学科卒業生

滋賀医科大学開学40周年、おめでとうございます

下田　和孝／獨協医科大学精神神経医学講座　主任教授

合格発表の瞬間、自分の受験番号だけが目の前に飛び出てくるように見えたことを今でも思い出す。入学当時、コンビニエンスストアは言うに及ばず、瀬田駅前にはまだ何もなく、駅前にはバス停と小屋のようなパン屋（？）、少し歩くとパチンコ屋と２階に焼肉屋、銀行、国道１号線の交差点を渡って「ヒカリ屋」という程度の街だったから、のんびりした雰囲気だった。

私は1977年入学の３期生なので、瀬田キャンパスで１年生から６年生まで通して過ごした。さっそく軽音楽部に入部した。「軽音楽部に入部するとドイツ語の単位はとれない」というまことしやかな噂が流れていたからだろう、３期生では本当の音楽好きの内田 直君（現・早稲田大学スポーツ科学学術院教授）と私のみが入部したが、２名とも留年することもなく、進級させていただいた。

自分が教職についてみて、当時の自分を振り返ってみると、母校の担当教官の先生方の忍耐強さに頭を下げざるを得ない。卒業後、母校の精神医学講座に入局し、髙橋三郎教授（現・名誉教授、埼玉江南病院・院長、獨協医科大学・特任教授）をはじめとする、諸先輩方が私の特性に合わせ、「オーダーメイド」的に教え、授けていただいた。不勉強であった小生の現在があるのは、ひとえに、母校、滋賀医科大学のおかげである。

2003年１月から栃木県にある獨協医科大学精神神経医学講座に異動したが、当初は苦労の連続であった。母校という親鳥の羽の下でぬくぬくと過ごしていたことを、外の世界に出てようやく理解した。しかし、難局の打開策を考える際に「髙橋先生ならどのように対処しただろうか」「確か、石田（展弥先生（昭和57年卒、２期生）、現・明和会　琵琶湖病院理事長）医局長がこんな風に医局員を諭していたな」などと思い出し、何度もピンチを切り抜けた。「背中を見て育つ」ということであろう。

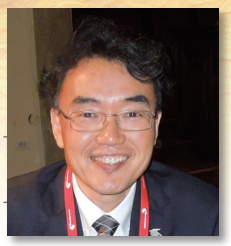
前述のように３期生であったから、先輩は２学年しか存在しなかった。「自分たちが滋賀医科大学を盛り立てないで、誰が盛り立てるのか！」という思いが我々３期生には特に強かったと思う。だから、私も故郷、岡山に帰らなかった。滋賀医科大学のbrothers & sistersの中から「○○君が△△大学の教授になった」「◎◎君が☆☆病院の院長に昇進した」などということが耳に入ると「お～、よかったねえ～」と大声をあげてしまう。学会で話題になった研究者が同窓であったりすると「あ、あいつはねえ、私の母校の後輩でしてね～」などと、所謂「ドヤ顔」になってしまう。先日は前田士郎先生（現・理化学研究所、昭和60年卒、５期生）の赴任予定先の琉球大学の某教授から「滋賀医科大学は層が厚いですな」と返され、更に「ドヤ顔」である。

滋賀医科大学のbrothers & sisters、これからも私に「よかったね～」と「ドヤ顔」させてください。よろしくお願いいたします。

医学科卒業生

四十周年を迎える滋賀医科大学にメッセージ 幅広い視野をもった医療の担い手を育てる大学

武内　一／佛教大学 社会福祉学部



私は、大学卒業後市中病院で研修し、10年ほどしてふるさと小豆島の町立病院小児科に４年かかわり、医師になって25年ほどしてから今年で６年目ですが、大学の社会福祉学部でささやかな研究

と教育にあたっています。

それでも私は、根っこは臨床の小児科医です。子どもたちの育ちを医療が支えることに大きな関心があります。思い起こしてみると、医師になった頃、大学で自分自身が受けた医学教育と現実の医療現場とのギャップに驚きました。ふつうに暮らす子どもたちが医療を求める場合は、ウイルス感染がほとんどの市中感染症と気管支喘息、アトピー性皮膚炎、それに発達障害などを含んだ子育てへのアドバイスです。「小児科学」として系統だって学んだ中身の数十分の一が臨床現場のほとんどの医療を占める。それが、町中での臨床の現実だったのです。

私は、子どもたちの育ちをアドボケートするのが、小児医療の本質だと思います。市中感染症の代表であるカゼに不要な抗菌薬を使わないガイドラインづくり、そのためにも重症感染症を予防するヒブワクチンや肺炎球菌ワクチンの導入を求める患者会活動、阪神淡路そして東日本大震災での支援活動、これらが子どもたちの育ちを支える医療に繋がるとの思いで私が取り組んできた仕事や活動です。大学人となり、「脱子ども貧困」をキーワードに自身のフィールドを模索しています。

本題ですが、わが母校である滋賀医科大学には、幅広い視野をもったレベルの高い医療・看護の担い手を育てていただきたいと思います。本来医療は、必然的に病気に向き合う弱い立場の方と共にあります。ですから、例えば「働き手が入院した時の残された家族の困惑」や「子どもの発熱に対する母子家庭のお母さんの苛立ち」といった生きる人の姿に、共感をもって向き合える医療・看護の担い手を育てていただきたいです。そんなことを思いながらPubMedで「子ども貧困」と「小児がん・悪性腫瘍」を検索すると、共に重要な論文テーマとなっています。しかし、医中誌では「子ども貧困」は悪性腫瘍と比べるとまったくと言っていいほど論文があがってきません。これは日本の医学研究のあり方に問題があると思います。大学教育に、リアルワールドの問題としてSocial PediatricsやChild Public Healthをもっと取り入れてほしいです。日本の子どもの６人に１人がOECD基準でいう貧困状態にあることは、学生や教員に実感をもって理解されていないかもしれませんが、貧困下にある子どもたちに日々関わるのが、現実の臨床小児科という分野です。

地域医療に貢献する滋賀医大の成長を見聞きすると、私はそうした母校の軸足のありかたに共感を覚えます。これからも志を高く掲げ、繰り返しで恐縮ですが、幅広い視野をもったレベルの高い医療・看護の担い手を育てていただくことを心から願い、期待をしています。

滋賀医大ガンバレ！

医学科卒業生

開学40周年にあたり思うこと

寺田　雅彦／磐田市立総合病院 副院長兼教育担当部長

滋賀医科大学が開学40周年を迎えることになりました。そしてその間に母校が数多くの医療者を国内外に輩出し地元地域だけでなく日本や世界の人々の健康増進や医学の進歩に多大な貢献をしてきたことに卒業生として大きな誇りを感じます。

この節目の時期にいろいろ考えてみると、このような母校の発展には40年前に何もないところから新設医科大学としてスタートした本学の開学当初から育まれた気質にあるように感じます。すなわち、伝統がないぶん従来の常識にとらわれない自由な発想をよしとする気風と何もないところから築き上げようというパイオニア精神です。しかしながら、滋賀医科大学も40周年を迎え新設医科大学というレッテルを返上し、成熟した１つの医科大学として未来に向けて歩みだす時期を迎えているように感じます。

そこで、改めて「滋賀医科大学とは何でしょうか？」それは何といっても本学で学んだ我々が何を考えどのように行動するかにほかなりません。40周年という時期に、「我々は社会や患者の信頼に値する正しい考え、正しい行いをしているのか？」と今一度我々ひとりひとりが改めて自らに

問う必要があると感じています。自己啓発の分野で著明な米国の作家ジェームス・アレンの言葉に、「現在のあなたは、過去の思考の産物である。そして明日のあなたは、今日何を考えるかで決まる」というものがあります。この言葉をこれからの母校のあり方にあてはめるならば、「現在の滋賀医大は過去の我々の思考の産物である。そして、明日の滋賀医大は今日我々が何を考えるかで決まる」ということになるでしょうか。いずれにしても、我々ひとりひとりがこれからの自分のあるべき姿を思考することが、滋賀医科大学の明日を切り開くことになるのではないかと思います。

医学科卒業生

今、思うところ

古家　大祐／金沢医科大学 糖尿病・内分泌内科学 主任教授

1984年に滋賀医科大学を卒業して、あっという間に30年が過ぎた今、思うところが湧き出てきました。学生時代のこと、入局して医師として臨床、研究に没頭した旧滋賀医科大学第三内科のことなどです。これまでそのような余裕がなかったのか、本来の性格である自省がないというのか、この年になるまで日々を生きてきました。

猛省すべきところですが、入学してからの３年間は、医学生としての日々を過ごした思いはありません。日々、波乗り、夜のディスコ、麻雀のことなど、小遣いの心配をしながら過ごしていました。恩師の一人である故横田敏勝先生からは、講義のある朝にはお電話を頂き、「今日は、出席せよ」と鼓舞して頂きました。当時は、叱責かと思え、聞く耳持たず、つまり、欠席を繰り返した頑固で実直でなかった自分のさまが思い出されます。このような私を気遣ってくれた同級生である３期生にも、多大な迷惑をかけてしまったことが思い出されます。そのため、１年間の留年生活を送ることになりましたが、今から思えばそれを機に少し方向転換できたと感謝しています。

卒業後の進路も悩みましたが、旧滋賀医科大学第三内科 安田 斎名誉教授が神経内科の奥深さを熱意をもってお話し頂いたことに感銘を受け、第三内科に入局することになりました。入局後は、恩師である初代教授　繁田幸男先生、吉川隆一先生、羽田勝計先生のご指導の下、糖尿病、腎臓病の臨床と研究を始めました。当時は、同期がそれぞれ10名以上の患者さんを担当することもありましたが、少ない医局員数であったため２年目からは、糖尿病腎症の診断基準の作成のため尿中アルブミンの測定法を確立する臨床研究も始めることになりました。吉川先生、羽田先生から厳しいご指導を受けましたが、今の自分があるのはと先生方に感謝しています。何といっても、旧第三内科の良いところは、繁田名誉教授を筆頭にすべての先輩の先生方が自由な研究を求められた結果、個性を尊重して受容できる環境が構築されており、自省もできない私が長く過ごせたと思っています。このような伝統ある環境を維持しながら、滋賀医科大学　糖尿病内分泌・腎臓・神経講座が益々ご発展されることを祈念している次第です。

最後になりましたが、滋賀医科大学　開学四十周年を迎えられましたこと心よりお慶び申し上げますとともに、さらなる滋賀医科大学の飛躍を祈念しております。

医学科卒業生

受け継いだものを次の世代に

田中　逸（6期生）／聖マリアンナ医科大学
代謝・内分泌内科教授、付属病院副院長

私は工学部を卒業後に自動車会社に１年半勤務してから昭和55年に母校に入学しました。現役や１浪の同級生から見れば、若年寄の存在で記憶力の限界に挑戦する毎日でしたが、昭和61年に何とか卒業できました。卒業後は第三内科に入局し、大学病院と健康保険滋賀病院での研修・研究を経て、平成６年から東京都済生会中央病院に就職、平成７年には順天堂大学に異動し、平成18年から縁あって現在の職場に勤務しています。第三内科の医局員時代は内科全般のトレーニングと糖尿病の臨床、基礎研究に明け暮れていました。多くの恩師や諸先生方から指導と刺激を受けたことが、専門医や学位の取得、学会発表や論文掲載などの成果として少しずつ実を結び、自分自身の成長を実感できた日々がつい昨日のことのように思えます。

学生時代の６年間は医師になるための準備、第三内科時代の９年間は医師・医学研究者としての基礎を形成する期間でした。合計15年間の母校での経験はかけがえのない財産で、今日の私自身があるのは母校のおかげと深く感謝しています。昨今は卒業後、あるいは初期臨床研修後に母校を離れる方が少なくありません。どんな環境でも自分自身の努力で成長することは可能ですが、滋賀医科大学の素晴らしい設備と環境、豊富な人材、診療・研究レベルの高さはどこの大学にもひけをとりません。大学を離れてから、強くそう思うようになりました。多くの方が母校に残り、切磋琢磨して互いに成長し、その結果として大学全体がさらに発展することを心から願っています。

聖マリアンナ医科大学は神奈川県川崎市の北西に位置する小さな私立医科大学です。私は１年生の病院実習と３年生の系統講義、５年生のBSL、６年生の集中講義を担当し、６年生の担任もしています。定年まであと６年となり、私自身の伸びしろはもうありませんが、これから成長する若い世代の方に滋賀医科大学時代に得た全ての知識や経験・考え方を引き継いでいきたいと思っています。

医学科卒業生

滋賀医科大学40周年に寄せて

西村　明儒（７期生）／徳島大学 ヘルスバイオサイエンス研究部
法医学分野教授

滋賀医科大学開学四十周年おめでとうございます。大学は違えども医学部の運営に関わり、我が国の医学教育の一翼を担う者として、母校の四十周年をお祝いする機会を得ましたことを心より嬉しく思っております。新設医科大学として設置されて四十年、今では、高度先進医療を担う滋賀県になくてはならない存在として、県民の厚い信頼を受けていると感じております。これは一重に至る所で活躍する卒業生ひとりひとりへの信頼の証しであり、大学を運営され、教育を担っていただいております諸先生方のご指導の賜と感謝申し上げたいと思います。小生、医学部教務委員長を拝命しておりますが、現在の高等教育における差し迫った課題は、グローバリゼーションと地域の課題を発見・解決する能力を有する人材の育成で、そのための改革の波は、ご多分に洩れず、医学教育へも押し寄せております。いや、むしろ、一方では、USMLE (United States Medical Licensing Examination)の受験資格を担保するために10年以内に分野別認証を義務づけられ、他方では、地域

医療の担い手確保を期待されている医学部は、まさにその渦中にあると言えるでしょう。小生が准教授として採用されておりました平成10年以前に滋賀医科大学では、チュートリアル教育を導入し、教育改革を進めた実績があります。数年後、異動先で導入されようとしていましたので、全国的にもかなり早い導入と感心しておりました。是非、次の10年、五十周年に向けても、独自の時代を先取りした改革を進めていただきたいと思います。それと共に、若い卒業生の皆さんや在学生の皆さんは、教育改革や医療制度改革の波に呑まれないように一生取り組める課題や診療科を見つけて取り組んでいただければと思っております。初期研修の義務化以降、卒業生が母校の附属病院に残る率が減っていると嘆かれているお声を耳にしますが、卒後すぐに母校を離れた身としては、言い訳がましくもなりますが、結果的に卒業生が広く活躍することになるので、国立大学としては、悪くないのではないかと思っております。在学生の皆さんには、滋賀医科大学が他大学に多くの教授を輩出していることも知って欲しいものです。

最後になりましたが、今後も滋賀県の地域医療の核として、医療の最後の砦として活躍していただくとともに全国へ、そして、世界へ優秀な人材を輩出していただくことを祈念しまして、母校、滋賀医科大学開学四十周年へ寄せるお祝いとさせていただきたいと思います。

看護学科卒業生

開学四十周年記念に寄せて

出口　宏美／パナソニック健康保険組合所属　パナソニックセミコンダクターソリューションズ㈱長岡地区

この度は、滋賀医科大学開学四十周年、誠におめでとうございます。

私が滋賀医科大学に入学したのは1995年、早20年近く前のことです。看護学科２期生ということもあり、入学当時看護棟はまだ影形すらない更地、１期生の先輩方を頼りに、その後完成した真新しい看護棟で学ばせていただきました。同級生72人で毎日授業を受け、実習し、長く一緒に過ごした仲間たちとは､時にぶつかったりしながらも､様々な思いや時間を共有して、楽しく過ごしました。４年間は長かったようで、今振り返れば本当にあっという間だったと思います。講義で学んだこと・実習で経験したことなどは、今も大きな財産として残っていますが、欲を言えば、もう少しまじめに学んでいればよかったと、少し自分に後悔もしています。卒業後は滋賀医大へ足を運ぶ機会もほとんどなく、湖医会会報誌などで近況を知ることしかできませんが、キャンパス内の様子も当時から刻々と進化を遂げておられることでしょうし、卒業生の皆様も全国各地の様々な分野でご活躍されていることでしょう。

卒業後の私は大阪へ出て、パナソニック健康保険組合（当時は松下健康保険組合）へ、産業保健師として入社しました。以来、今年で勤続16年目を迎え、現在は、京都府長岡京市にある半導体事業の会社の健康管理室に配属され、勤務しています。従業員数約3,500名の大規模事業場で、健康管理室も常勤医師１名、非常勤医師２名、看護職６名の９名体制という大所帯ですが、偶然にも９名のうち私を含め４名が滋賀医大卒のスタッフです。健保スタッフに滋賀医大卒スタッフが非常に多いという訳でもなく、京滋阪神間の多数の事業場の健康管理室間での異動もある中、４名も揃うことは大変珍しいめぐり合わせなのですが、不思議な縁で繋がっているメンバーに囲まれながら、日々従業員の健康管理業務に携わっています。

働き盛りの世代ほど、病気への自覚に乏しく、生活改善や医療へ繋げることが難しく、また近年では、悪性腫瘍や脳心疾患の在職中の罹患率も高くなってきており、早期に治療してまた元気に復職し活躍するために、より高度で最新の医療が求められていると痛感しています。その点からも、滋賀医大には、より先進的・先端的な医療による地域医療への貢献と、より特色のある教育・研究等を期待しております。

今後も益々のご発展をお祈り申し上げます。

看護学科卒業生

卒後14年を振り返って

島本　行雄／京都橘大学 看護学部 成人看護学助手

滋賀医科大学開校40周年おめでとうございます。

看護学科３期生の島本行雄です。

わたしは本校を卒業後、本学医学部附属病院に就職しました。あまり出来の良い看護師ではなかったので、先輩方・患者さんに多くの御迷惑をおかけしたのを覚えています。それでも、今日まで看護師を続けてこられたのは、先輩方･先生方･その他多くのスタッフの方々からの暖かいご指導、患者さんから頂いた応援や感謝のお気持ちのおかげと感謝しております。わたしは本学で脳神経外科・循環器内科・呼吸器内科・血液内科・消化器内科・精神科と、多くの診療科を経験させていただきました。そのため、本当に数多くの患者さんに関わらせて頂く機会を得ました。特にどの診療科でも終末期の患者様との関わりは、時に後悔や虚無感を感じることがありましたが、逆に大きな喜びや達成感を与えてくれることもあり、今も看護を続ける原動力になっています。

わたしが仕事を始めてからでも、看護の役割は大きく変わったように思います。医療はどんどん進歩し、その都度、技術や知識を得ようと必死で過ごしてきたように思います。それでも、最初に勤めていた脳神経外科領域での経験・知識は、今となっては古くなってしまっているのだろうと少し寂しく思います。個人の価値観や社会のニーズも随分変化したと感じます。わたしが働き始めたころ、治療方針に患者さんの意志が反映されることは、今ほどはなかったように思います。病気になれば長期間病院で過ごし、亡くなる場所も病院ということが当然の風潮でした。そういった社会のニーズの変化は看護の活躍の場を在宅・福祉の分野へと拡げました。また、医療の専門的な分化は、高い専門性を必要としました。逆に薬剤師・理学療法・作業療法・介護士・MSW・福祉士・栄養士など他の専門職種の業務拡大などにより、委譲が進んでいる役割も増えてきました。

今のわたしでは、看護が今後どのような役割を担っていくことが良いことなのかはわかりません。ただ、わたしが多くの現場や役割を経験させてもらって感じたことは、役割が変化しても、苦しみ悩まれている人に真摯に向き合い、出てきた感情に素直に「行動する」ということには変わりがないということです。そうした行動をとり続ける限り、状況やニーズがどのように変化しても、良い看護を提供できるのではないかと愚考しています。

わたしは本年度より、京都橘大学看護学部の助手として勤務することになりました。まだまだ自分自身も若輩ですが、これからの看護を担っていく後輩たちに、看護の素晴らしさを伝え、応援をしていければと思っています。

看護学科卒業生

開学40周年記念に寄せて －Scienceと向き合う－

森本　明子（８期生）／滋賀医科大学臨床看護学講座

滋賀医科大学が開学40周年を迎えましたことを、卒業生として、また本学の教職員として心からお祝い申し上げます。

私は８期生として本学看護学科を卒業後、本学大学院修士課程に進学し、その後、本学医学部附属病院で看護師として循環器、呼吸器、救急の病棟で勤務しました。その後、大阪大学大学院博士課程を修了し、2013年４月１日より滋賀医科大学臨床看護学講座成人看護学領域の講師として勤務しています。

滋賀医科大学が開学30周年を迎えた頃、私は看護学科で学んでいました。講義や実習を通じて多くの学びを得ましたが、特にウィリアム・オスラー氏の“Nursing is an art based on science”という言葉に感銘を受けました。そして、看護実践の基盤となるscienceについて学びを深めたいと考え、大学院への進学を決意しました。

大学院では本学臨床看護学講座成人看護学領域教授の宮松直美先生のご指導のもと、少しでも自身の研究が良いものになるよう、思考し、調べ、議論する、という日々を送っていました。自身の不甲斐なさに落ち込む日もありましたが、本学医学部附属病院看護部の方々や内科学講座（糖尿病・腎臓・神経内科）の先生方のご協力により、調査を実施し、研究をまとめあげることができました。

その後、本学医学部附属病院に入職した際、看護部の方々がとてもあたたかく迎え入れて下さったことをよく覚えています。看護師として働く日々は、大学院での日々と同様に少しでも良い看護を提供できるよう、思考し、調べ、議論し、実践する、という日々でした。日々、今行っている看護を疑うこと、日々、少しでも良いものに変えること、変えたいと思うこと、がscienceの第一歩であり、それを継続することがscienceと向き合うことだと思っています。

大阪大学大学院での日々はまさに向き合い続けた日々だったと思いますが、自身の不甲斐なさに落ち込むことも一層増え、何度も気持ちが折れそうになりました。そういったとき、研究室の仲間や先生方に支えられ、人との繋がりの大切さを再認識した日々でもありました。

“Nursing is an art based on science”という言葉に感銘を受けてから10年が経ち、滋賀医科大学が開学40周年を迎えた今、私は本学臨床看護学講座成人看護学領域の講師として教育と研究に携わっています。そして、学生には、日々、少しでも良いものに変えること、そのために主体的に学び、思考することが大切であることを伝えています。

最後に、私の現在の日々を支えて頂いています臨床看護学講座成人看護学領域の宮松直美先生、森野亜弓先生、園田奈央先生、呉代華容先生に、この場をおかりして御礼と感謝を申し上げます。

看護学科卒業生

看護師の経験を活かし、行政の場で働く

松野　文恵／厚生労働省

私は滋賀医科大学看護学科を卒業後、附属病院に４年間勤務し、その後２年間イギリスに留学、昨年秋に帰国し、現在は厚生労働省にて看護系技官として働いています。

祖母が助産師であったことも影響し、人と深く関わることができ、また女性として一生働ける看護師という仕事に魅力を感じ滋賀医科大学に入学、その後就職しました。手術室に４年間勤務しましたが、最初の１年間はすべてが怒涛のようだったことを今でも鮮明に覚えています。緊張感ある手術室での職務は大変やりがいのあるものでしたが、生活習慣病が原因で手術を必要とする多くの患者様に接することも多く、患者様の心身・財政的負担について考えさせられることも多くありました。

４年間の勤務の後、公衆衛生と医療政策を勉強してみたいとの思いを強くし、大学院留学を決意しました。私は小学校５年生の頃、イギリスに１年間在住しており、いつかイギリスでもう一度生活してみたいと思っていました。イギリスのエジンバラにある語学学校で１年間の英語の勉強の後、エジンバラ大学修士課程の国際保健・公共政策コースに入学しました。

大学院生活は予想していた通りに大変なものでしたが（英語の聞き取りが難しい、議論に中々参戦できない、英語でのプレゼンが…等々）、アメリカ、カナダ、アフリカ諸国からも多くの留学生が集まるイギリスでの学びは私の狭かった見識を大いに広げてくれました。

日本の公的医療保険制度をテーマにした修士論文を執筆する中で、保健医療行政に関わってみた

いという思いを強くし、この４月より医政局の看護課で看護教育担当として働いています。初めてのデスクワークや法律の関わる業務にいっぱいいっぱいになりながら、職場の皆さんに色々教えてもらいつつ、日々をこなしている状況です。

看護師という仕事は本当に様々な場で活躍することのできる職業だと思います。今、私は行政の場で働いていますが、大学院や厚生労働省への推薦状をいただいたりと、その選択の後押しをしてくださった滋賀医科大学に大変感謝しております。まだまだ新しい職場ではわからないことばかりで精一杯の日々ですが、大学と附属病院での学びを新しい職場で活かせるよう努力していきたいと思います。

看護学科卒業生

助産師として

馬場　未来／野洲病院

助産学科の一期生として卒業後、助産実習先である野洲病院に就職し、七年が経ちました。

看護師への憧れから、滋賀医科大学に入学。その後看護学部に助産課程が出来ることを知り、助産師になりたい、そう思い志願しました。

一般教養から専門的領域の学習を通して母性看護に一番興味を感じたこと、生命の誕生という神秘的で喜びのある場面に自分もたずさわりたい、そう感じたことがきっかけです。

私が勤務する野洲病院産婦人科病棟は年間百二十例の分娩を扱っています。年間分娩数は少ないものの、妊娠中から分娩、産褥まで一人一人の患者さんにゆっくりと関わっています。また院内での業務だけではなくヨガ、ベビーマッサージ、マタニティスイミングなど様々な地域での活動を行っています。

勤務は病棟・外来業務で、外来では助産外来や産後健診など医師との連携のもと、助産師主体での健診があり、助産診断を行っています。昨年からは、身体的・精神的に不安や負担を感じている褥婦のサポートが出来る様、産後ケア入院が始まりました。地域のニーズに沿って、チーム一丸となって新たな取り組みを常に行っています。この職場で働いている中で助産師としての力量を発揮することが出来、仕事にやりがいを感じています。

助産師になりたい。そう思ったきっかけである妊娠やお産の喜びを日々感じています。しかし残念ながら全てのお産が正常経過をたどるわけではなく、時に流産、死産、切迫早産での長期入院、児の異常があり、またお産以外にも不妊、中絶、婦人科疾患、悲しみや不安、ストレスと様々な思いを感じている患者さんがいることを知りました。一人一人の患者さんとどの様に関わればよいのか、日々葛藤と模索ですが、患者さんの思いを受け止めて、寄り添える助産師になること、それが今の私の目指すところです。

今回文章を書かせていただくにあたり、学生生活を思い返し懐かしく感じています。

私の学生生活は部活と学業で毎日が充実しており、あっという間の４年間でした。中でも一番思い出深いのは、一か月半二十四時間体勢での助産臨床実習です。実際に分娩介助をさせていただき緊張やプレッシャーは大きく、自分のふがいなさに落ち込むことも多々ありました。責任も大きくその分知識や技術向上のため一生懸命でした。私が実習を乗り越えられたのは支え合った仲間がいたこと、相談に乗ってくださり、たくさんのアドバイスを頂いた先生あってのことだと思います。

実際に働き出してからも、自己成長のチャンスはたくさんあります。助産師キャリアアップ研修、助産師出向システムと新しく出来るシステムに積極的に志願し、自己研鑽に努めています。また自身も経験や出産体験を通じて、考え方や視野が広がってきていると思います。

私は今生命の誕生という、その家族にとって人生で数回の貴重な場面に立ち会っています。産婦さんが安全に安楽に、幸せなお産が出来るよう、今後も学生時代と変わらず日々勉強、スキルアップをしていきたいと思います。